

# 極限のリーダーシップ

「地球が壊れる」と思ったという揺れと津波後、被災者は着の身着のまま避難に駆け込んだ。飢えと行き先が見えない不安、知らない人間同士が身を寄せ合い、生き抜くため、避難所はいかにして立ち上がり、どう運営されたのか。

## 宮城・石巻の7日間

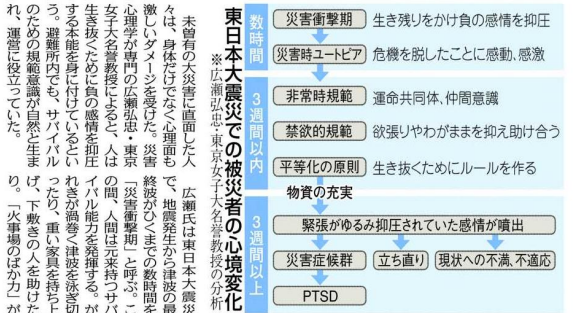
三月十日、沿岸の食料を確保するしなごに入れ、「今日の分り禁止して」と全人は「目の前のしなご」を食べていく。校長は「しなご」を食べていく。校長は「しなご」を食べていく。校長は「しなご」を食べていく。

## 食料調達や分配奔走

三月十日、沿岸の食料を確保するしなごに入れ、「今日の分り禁止して」と全人は「目の前のしなご」を食べていく。校長は「しなご」を食べていく。校長は「しなご」を食べていく。校長は「しなご」を食べていく。



津波が襲った直後の渡波小中学校。避難所はがれきの山。避難所はがれきの山。避難所はがれきの山。避難所はがれきの山。



## 「生き延びる」規範生む 物資充実で感情噴出も

出た間、恐怖や悲嘆など、識は緩んでくる。「生き延びる」規範が生み出される。物資が充実に達すると、抑圧されていた感情が噴出し、立ち直りや現状への不満、不適応が現れる。

- リーダー 西野さんの震災から7日間
- 3月11日 JR渡波駅で津波に遭遇
    - 約100人と一夜を明かす
    - 消防署にトランシーバーを探しに行くが入手できず
  - 12日 渡波小へ100人の受け入れ要請
    - 付近の店を回り食料を集める
  - 13日 食料を探しに来た近くの高校の避難者に菓子を分ける
    - 家族の無事を確認
  - 14日 大型スーパーの食料を独占した学校に交渉へ
    - トトラック1台分の食料を提供してもらう
  - 15日 渡波小に給水車到着。市職員も訪れ市主導の避難所運営開始
  - 16日 食料をくれた学校に礼に行く
  - 17日 帰宅

と言えない日々が続いた。それでも一渡波の事務員吉野代さん(41)は振り返る。「西野さんは交渉能力に長け、物事を分けてくれる人。災害時のリーダーとして、避難所について考えます。」



## ごめんね、なずな…

「怖い」という気持ちは、いつの間にか薄れていた。原発から3km圏内の一時帰宅が実施された1日、地元の福島県大熊町が仕立てたバスに揺られながら、幸さんは帰宅の喜びをかみしめていた。車窓から海が見えると、誰からともなく歓声が上がった。「当然だよ。おれたち、波

の音を子守歌代わりに育ったんだから」。幸さんの隣で、光一さんがつぶやいた。とはいえ、感傷に浸る時間はなかった。一時帰宅で与えられたのは2時間。バスを降りると、2人は一目散に自宅へ向かった。手元の線量計は毎時50μS/hを超を指していた。緊張と焦り、残暑の日差し。防衛服の下で汗が滝のように流れ落ちた。懐かしいわが家はもう目の前にあった。けれども、表札の掲げられた門の前で、2

## いつの日か 原発1kmからの避難

人の足が止まった。門の上に、うずくまるようにして白骨化した猫の死骸があったからだ。「なずー」。幸さんは思わず叫んだ。震災当日、自宅を飛び出していたため、連れてくることのできなかった飼い猫「なずな」だと直感したからだ。ごめんね、ごめんね…。言葉が続かなかった。光一さんに促されるまま、幸さんは自宅

のドアを開けた。だが、目に飛び込んだ光景に思わず目を背けた。「家の中がすっかり色あせて見えたんです。まるで灰色の世界だった」

**福 (はなわ) さん一家** 原発事故で大熊町から避難。光一さん (43) と妻幸さん (43)、次女沙也加さん (15) は愛知県豊田市で暮らし、福島県会津若松市に移った。長女梨奈さん (18) は東京で大学生生活。